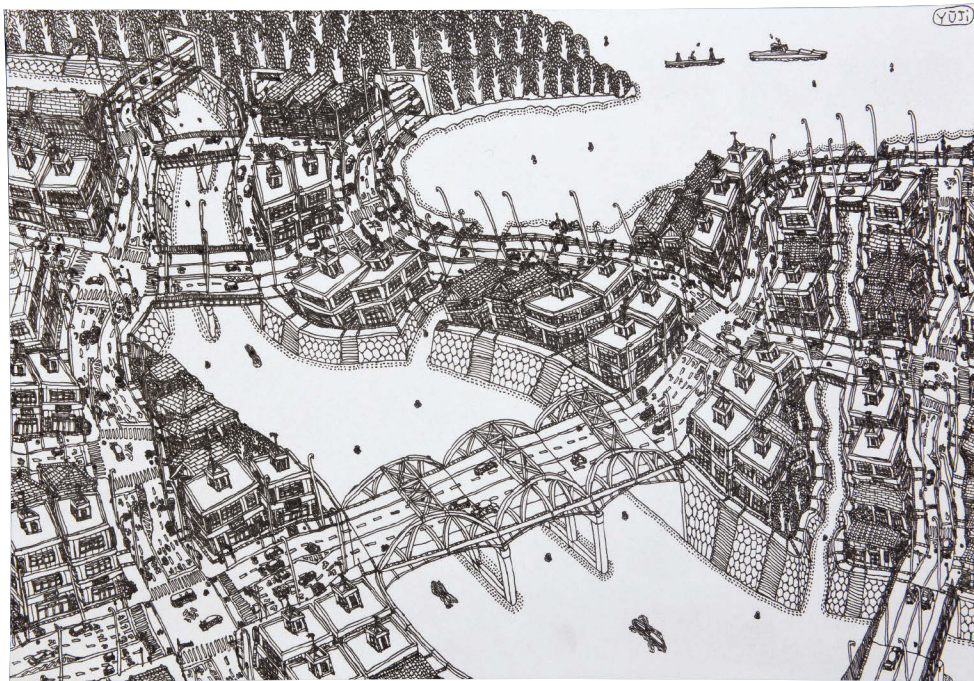


アートとケア

アール・ブリュットから受けるもの

1

アール・ブリュットとは、
美術教育を受けていない人々が創造する「生」の芸術。
心身に障害を持つ作家も少なくない。
あるがままの作家の内なる世界とのやりとりを迫る作品は、
私たちに何をもたらすだろうか。



「心でのぞいた僕の街」
(2016年、紙、油性ペン、412×596mm)

撮影：大西暢夫

アール・ブリュットに思う

糸賀一雄記念財団 理事長 元・厚生労働事務次官
辻 哲夫

アール・ブリュットとの出会いは、私がかつて勤務した滋賀県を起点に内外で活躍している北岡賢剛さんたちが立ち上げたNO-MAという美術館だった。

これはあの有名なミロ、ゴッホ、ピュッフェと同じではないかという驚き、ビルなどの高所から街を眺めることが好きな作者が上空から見た街の不思議な存在感、縄文の土器と同じような焼き物の造形の迫力など、次々と受けた鮮烈な印象が今も蘇る。

美術にこれといった知識もないものの私なりに語るならば、その作者たちは洗練されてはいないが、否、そうであるがゆえに、先に述べたような著名な画家が本当に訴えたかったことを端的に表現し

ており、それが私たちの心に届いているのではないかということである。

日本の障害者福祉を切り拓いた糸賀一雄先生は、心身に重い障害があり意思疎通もかなわない子たちが生きようとする姿が発する力を見だし、「この子らを世の光に」と喝破し、全ての人が平等に持っている尊厳の尊さを訴えられた。人は全て、さまざまな障害を含む無限の人間存在の分布の中の1つの個性であり、誰もが輝く存在であるということだと理解している。そして、それらの中の輝く個性がアール・ブリュットの作品を通して、無言でしかし雄弁にそのことを私たちに語りかけているように思うのである。

今月の作家

辻 勇二 Yuji Tsuji

1977年生まれ／愛知県在住

鳥の目を持つように、美しいモノクロの俯瞰図を描く人。高いところから風景や街並みを眺めるのが好きで、いつまでも見続けていられる。作品1点に2か月ほどかけて、記憶した実際の街に自身の空想も交え、下描きをせず油性ペンで直描きし、頭の中にある街並みを外へと描き出していく。

(解説：小林瑞恵)